

記録  
16ミリ  
カラー／23分  
日・英・独語版

■企画  
株式会社コパル光機  
製作所

スタッフ

■製作  
村山英治  
■脚本・演出  
樋口源一郎  
■撮影  
藤井良孝  
■音楽  
長沢勝俊  
■照明  
高橋一造  
■録音  
伊藤 亨  
■進行  
利光久輝  
■解説  
宮田 輝

この作品は、日本のカメラが西ドイツを抜いて輸出の花形になった時代に製作された。



日本に初めてカメラが伝わったのは天保12年（1841）、フランス人ダゲールの発明後、わずか3年目のことであった。真昼の太陽の下で約15秒、手で取り外してまたははめる、オランダ伝来のレンズキャップ式シャッターで写し、乳剤の乾かぬうちにあわてて現像したものだ。まもなく乾板が発明され、写真屋さんはハイカラな技術者として登場した。この頃のシャッターは、空気の圧力を利用して開閉する幼稚なサイレントシャッターだった。しかし、大正の終わり頃からスピードの出るスプリングを使ったレンズシャッター付きのパーレットカメラが日本でも製造されるようになった。アメリカのベストポケットコダック、ドイツのピコレットなどに似たカメラである。ロールフィルム、さらに35ミリフィルムの出現とともにフォーカルブレンシャッター組み入れのドイツのライカが登場する。

1949年、戦後の荒廃から立ち上がったシャッターの専門メーカー、コパル（株）コパル光機製作所は、板橋区の志村城趾に精密工場にふさわしいオートメーション化されたシャッター工場を建設し、世界的な日本カメラブームの一原動力となった。1000分の1秒つきシャッター、露出計連動シャッター、特殊連動シャッター、ペンカメラ用シャッター、ビューカメラ用 No.3 シャッターをはじめ金属羽根つきユニット・フォーカルブレンシャッターなど独創的なアイデアを生み出す。厳密な検査と種々の性能検査を経つつコンペアーに乗って次々と組み立てられたシャッターは、カメラメーカーに送られていく。